

肥田皓三先生に聞く ——島之内界限、思い出すこと——

聞き手・構成 後藤 静夫

日時：2012年9月27日（木曜日）

場所：雅俗山荘（大阪府池田市小林一三記念館内）

後藤 本日はお忙しい中、わざわざお越しいただきまして、誠にありがとうございます。上方の芸能や文化全般に関して、資料を博搜され精力的に研究・発言しておられる先生に、資料集めの事ですとか、お芝居の思い出、戦前の島之内のお話などをお聞かせいただきたいと思います。どうぞ思いつくまま、ご自由におはなしいただけますと幸いです。

肥田 私ら難しいことはひとつもわかりません、ただ自分の見てきたこと中心です。お役に立つやどうや、わからしませんが。

◆雑誌『上方』の思い出から —天牛書店、南木芳太郎—

後藤 早速でございますが、資料をたくさんお集めの先生にお見せるのも誠に恥ずかしいのですが、これ、ご存知の『上方』でございます（上方郷土研究会発行、132号、1941年12月）。

肥田 ああ、『大阪掃苔号』でんな。

後藤 はい。実はこれ、私が文楽の仕事を始めたのが1970年、万博の年でございます、それで、その頃から少しずつ古本漁りに行ってましたんですけども。これが『上方』入手の第一号でしたんです。

肥田 『上方』、はじめてお手に……。

後藤 道頓堀に天牛さんのお店がありまして。これ、天牛新一郎さんから直接私、いただいたもので。大変思い出深いものでございまして。天牛さんとも、直接お話させていただいたのも、これがきっかけで

ございましたし、天牛さんのお店も元は道頓堀のずっと東のほうにございました。

肥田 角座前に……。

後藤 はい、角座の辺りでした。

肥田 それはよろしゅうございました。あの人は大阪でもほんとに有名人でございますなあ。

後藤 そうですねえ。

肥田 大阪で本を買う、読書人は天牛さんの店で、なんか買わしてもろてるいう事で。

後藤 中尾書店さんですとか、いろいろ、立派な本屋さんございますけれど、天牛さんの所は若いもんでも買わせていただけるようなものがありましてねえ。

肥田 天牛さんは、本当に庶民的な方で。

後藤 そういう意味ではありがたいお店でございました。

肥田 懐かしいお方です。

後藤 ご丁寧な方で。それから、気に入ったものですから一と十年程かかって元版151冊全部集めました。

肥田 そら、これ複製出ましたけど、やっぱり木版のこの表紙があつての『上方』ですからなあ。ようお集めでございました。これは、南木芳太郎さんの見事な仕事です。

後藤 そうですねえ。

肥田 南木さんの日記が大阪市史編纂所から現在刊行中で、第二冊目出て。一冊目が『上方』刊行以前。二冊目が昭和6年から。ただ残念なことに、欠けた部分が多いみたいでしてね。それでもやっぱりこの

仕事してはる時のご苦心が、日記読んでたらこの雑誌の為に、ご家族あげて。

後藤 そうでしょうねえ。

肥田 本当にかかりきっておられます。日記拝見していても、ようやっではるなあとと思って。

後藤 わたくしは生まれが静岡県でございまして、あと、名古屋で高校までおりましたものですから、上方の事にはまったく疎くて。結局この雑誌の『上方』あたりからだんだんに勉強させていただきました。

肥田 そないして熱心にご覧下さりましたら、ありがたいこととございます。

後藤 そういう意味ではありがたい本でして、ずいぶんこれで勉強させていただきました。

肥田 私も『上方』が子供の頃から大好きでして。父親がずっと取ってまして。表紙が、子供でも分かりますやろ。長谷川真信さんの明治の大阪の風俗と生活の画が大好きで、中味のことは何もわからないのですが、この雑誌ほんとに大好きでした。そんなことでね、中学生の時に南木さんに質問の手紙書いて、返事いただいたりして。

後藤 へえ。

肥田 ほんならねえ、南木さん、日記付けてはる。昭和19年やったかなあ、昭和18年かなあ。「肥田皓三から質問してきたんで返事書いた」って。南木さん毎日事務的なこともずっと書いてはって。

後藤 そうでございますか。

肥田 そんで市史編纂所から「南木さんの日記にお前の名前出てるぞ」言うて。

後藤 (笑)

肥田 校正送ってくれはった。そんで「中学生の時に質問の手紙書いて、返事くれはりましたわ」、言うて。残念ながらそのお返事の手紙、二通か三通いただいたけれども、戦災で焼けてしもうて。南木さんをもの凄く尊敬してました。子供心に。将来は南木さんみたいな人になりたいという。とてもそんなん、なれるわけない。

後藤 とんでもない。あの、先生のご本でもちょっと読ませていただいたんですけど、佐古慶三さんがやはりいろいろ資料を集めておられて。



肥田 ああ、佐古さんな。

後藤 佐古さんが集めておられて、でも南木さんの方がもうひとつ先に行っているという。

肥田 平野町の夜店でねえ。あの夜店の古本屋でなかなかええもんが、出るらしかったですわ。ほんで、南木さんが、お店は道修町でして、薬屋はんに勤めてはりまして。夕方の古本屋の店が開くと同時に行きはる。佐古さんも駆けつけるのですが、いつでも南木さんが先に行っではるんですわ。

後藤 それ、一時デパートの古書即売会なんかで、先生と毎日放送の林喜代弘さんあたりが開店と同時に先陣争いのように競っておられたお姿と重なりますねえ。

肥田 今でも林さんらはやってはりますが、百貨店の入り口でみんな並んで、始まったら、エレベーターのそこ走ってって。7階か8階の会場まで行ってはりました。せやけど、もう古本もさっぱりでんなあ、この頃。若い人がもう本買いはれへん。本の好きな連中は歳いくばっかりで。

後藤 何故なんでしょうかねえ。

肥田 若い人は本買うても置く場所もないし。やっぱ奥さんに嫌われますのやろなあ、本溜めたりしたら。

後藤 汚れますしねえ、どうしても。私自身の記憶でも、以前は相合橋の通りですとか、もちろん道頓堀にもたくさんございましたし、それから千日前、あの辺りにずいぶんいい古本屋さんがあったんですけど、ほんとにこのごろ少なくなりまして。

肥田 昔からあの辺、古本屋多かった。戦前は。

後藤 戦前でもそうでしたか。

肥田 戦前、日本橋筋の古本屋はずいぶんございました。道頓堀も、わりに多かったと思います。

後藤 あとは天地書房さんが上本町にございましたね。

肥田 上本町の天地さんは戦後です。ほんで、難波に出てきはりました。天地さんはええ本屋です。

後藤 あと、先生ご存知の頃ですと、戦前では他は古本屋さんが集まっているような所はどちらが、たくさんございましたか？

肥田 戦後にすぐ出た牧村史陽さんの大坂ことばの会の『大阪弁』のミナミ特集やったかなあ。日本橋筋の古本屋のことを天牛新一郎さんが書いてはります。それぞれの店の名前も。

後藤 最後の第7集ですね。

肥田 せやけどね、戦前は、春になったら教科書の売りがものすごく盛んやったそうです。

後藤 教科書ですか。

肥田 中学生が新しい教科書を、新しいのを買うたら辛いもんで、古本で、内容はほとんど変わらない。改訂は加わりますけど、いちおう古いもんでも役にたつ。安うで買える。なかなか大変な人出やったということ。

後藤 そうなんですか。

肥田 そのお客さん専門の店がわりに多かったです。日本橋筋は。

後藤 先生あの、天牛さんの始めは、道にゴザひいて本を扱ったのが始めやって伺いましたけど。

肥田 ご自分で話してられたのは、夜店で、店出したんやと言うておられましたなあ。ミナミの二つ井戸に郵便局がございまして。二つ井戸の東横堀が道頓堀に曲るところ。そこで店出したって言うてはりました。今、なんやらホテルになってますわ。

後藤 アルデバラン、ですか。その、古い二つ井戸のお店っていうのは何年ぐらいまでございましたのでしょうか。

肥田 二つ井戸で夜店を出していたというのは、これはもう、本当に古いことやと。それから、おそらく大正時代になって、浜側で。道頓堀もあの辺、東道頓堀って言いますねん。今の竹林寺、あそこは川で



肥田皓三氏 プロフィール

元関西大学文学部教授。上方文化研究者。

昭和5年、大阪島之内生まれ。28年、大阪府立高津高校中退。大阪府立図書館、関西大学図書館の非常勤嘱託、関西大学文学部非常勤講師を経て、59年、同大文学部教授に就く。

専攻は書誌学、近世文学。おもな著書に『上方學藝史叢攷』（昭和63年、青裳堂書店）、『上方風雅信一大阪の人と本』（昭和61年、人文書院）、『近世子どもの絵本集・上方篇』共著（昭和60年、岩波書店、毎日出版文化賞特別賞受賞）、『肥田せんせいのなにわ学—こどもの遊びおとなの楽しみめども尽きぬ、なにわの文化』（平成17年、INAX出版）など。

平成17年、「肥田せんせいのなにわ学展」（大阪・名古屋・東京のINAXギャラリーで開催）で多数の家蔵史料を公開展示し、大阪の出版文化、遊びと楽しみの魅力を紹介した。

いつでも、キモノに風呂敷包みのお姿。洋服は持っておられない由。まさに最後のニッポン人といえよう。

した、高津入堀川言うて。戦後埋めたあとに竹林寺建ってまんねん。堺筋と高津入堀の間ぐらいの浜側で最初店やってたみたいで。本もあんまりあれへん。戸障子立てかけて、その棧に本並べる程度。そんなこと言うてはりましたけど、それも古いことですわ。その後、ちょうど東道頓堀の高津入堀に架かった橋が、清津橋言うのですが、その清津橋の西詰め。竹田という大きな呉服屋がございまして、間口の広い。その店を買うた言うてはりました。

後藤 なるほど。

肥田 そんなところから、どんどん大きくなって。次いで、堺筋を東へ入った南側。今のワシントンホテル、あの大きいホテルの場所、ずいぶん間口広いですけれど、そこへ移り、戦災で焼けるまで営業しておられました。二階が貸し座敷になってまして。素人浄瑠璃の会やったり、古本の入札会とか、いろいろやってたそうです。

後藤 天牛の二階で素人浄瑠璃の会をしていたというのは文楽の人たちからも聞いております。

肥田 間口の広い、そら日本一の古本屋。店に入ったら本が溢れそうに、店中本いっぱい。お客さんも活気あってねえ。たいしたお店でした。それで、天牛さんがハキハキと、お客さん対応してはりました。いつも「ありがとうございます」言いはるし、お客さんからの買物の時は、ソロバンですぐに値段言いはりますわなあ。「何円なり、何円なり、何円なり」言って。これはもう、他の店では絶対ようしないです。天牛さんはそれ、やりましたなあ。

後藤 道頓堀の店の時代でも、私その値段付けに立ち会ったっていうか、たまたま、行きあったことがあります。

肥田 まだ元気でしたからなあ。

後藤 時々、本売りに来られる方に、その場でやっておられましたとこ見せていただいた事ございます。

肥田 子供の頃から、天牛のお店よう知ってます。しかし、20年の3月の戦災で焼けてしまいました。南木さんの日記なんか読んでますと、南木さんも本好きでんのでお仕事の間の時間ができて、帰り道で天牛へ寄ったりだとか、道すがらの古本屋に寄って、ちょっと古本漁ってとか。日記の中にそれは頻繁に出てきます。本買うてはるのが息抜きやったみたいです。

◆蔵書のルーツを知る意義

一古書入札会年譜、中之島図書館、住友家一

後藤 先ほどおっしゃっていた、市が立つと。そういうのは戦前でしたら、どこが主に市の立ったとこなんでしょう。

肥田 これは古本屋の内部のことです、私は詳しい

事は存じませんが。ただ以前に、大阪の主な古本市の年譜みたいなものを作って、大阪古書月報に、古本屋が出してはる組合報に、載してもらいましたことがありますね。大阪でも、いくつかの古本屋さんのグループがあって、それが主になって大きな会を、定期的にやってはったみたいです。

後藤 それは先生の『上方學藝史叢攷』に収録されている「大阪の古書入札会年譜」でございますね。書林倶楽部などの名前があがっていますね。

肥田 古本屋さんはやっぱり市（入札会）が大事でんのでねえ。古本仕入れるっていうのは、市でみんな本を買ってくる。一番古本屋さんの大事な仕事でございますので。私らは、まったく門外漢ですので、外から窺ってるだけで、内部のことは何にも知りません。戦前、天牛の2階でも古本の大きな市をやった。わりに回数が多い。主だった戦前大阪の大きな古本の入札会、天牛2階でやっています。

後藤 それから戦前から続いている古本屋さんと言いますとどんなお店が。

肥田 本屋でっか？

後藤 はい。中尾さんとか。

肥田 はい、中尾松泉堂と心齋橋の中尾書店。それから、高尾書店。高尾さんも亡くなりました。高尾は古ございました。それから杉本さん。

後藤 梁江堂さん。

肥田 これが古いですわなあ。戦前から。その他、古いお店はおます。小関書店さんやとか。小関さんも亡くなりましたなあ。その他、古いお方、ずいぶん居てはります。

後藤 カズオ書店が朝日座近くの東櫓町にありました。あれも戦前からと伺いました。今、梅田の地下街にある萬字屋さん。あそこも古いですよ。

肥田 萬字屋、戦後ですわ。

後藤 戦後ですか。ああ、そうですか。

肥田 戦後ねえ、梅田新道の交差点の角（北西角）で開業しました。ええ本おまんねん。

後藤 そうですね。ただし、いいお値段で。

肥田 そうでんねん。萬字屋は飛びぬけてましてねえ。だけど、いい本おました。今居てはる地下街の、なんか倉庫やったらしいけど。それをうまいこと使

用できるようにしたはって。それはええ場所、一等地ですわ。萬字屋は、ええ資料を扱いはったことでは大阪でも髓一です。昭和33年に、『明治大正文学書目』いう目録を萬字屋編で出さりました。これね、明治文学の、漱石なら漱石の著作を初版全揃えとか、藤村やら田山花袋の本全揃えとかね、とにかく明治文学のほとんどの作家の著作の全揃え。空前絶後や言われた。それ以後に、文学関係の古本の目録で、あれを超えるものは出来てない。

後藤 そうなんですか。

肥田 それは見事な目録でした。いま阪急古書の町のリーチ書店のお父さんと、萬字屋の小林さんの先代と、もの凄い仲良し。二人とも神戸のロゴスで、子供の時から一緒に修業してはったんです。ほいでもの凄い仲良しでした。萬字屋さんは大阪で古本で成功してはって、リーチさんは美術品なんかを扱って。もちろん、古本もやりはる。ほんならねえ、リーチの先代が東京であの一口見つけてきはった。ほいで萬字屋に声かけた。という事です。

後藤 なるほど。

肥田 リーチの先代の回顧録がありまして。それを見てたらそない書いてて。わたしも意外でしたわ。意外なところでコレクションがあったのやなあと思うて。

後藤 そうですねえ。

肥田 本のコレクターなんて、そりゃあちこちに偉い人、なんぼでも居てはるみたいすわ。

後藤 今はどうでしょう。私たちのアンテナが行き届かんのか、そういう筋のいいコレクターの方の噂はあんまり聞きませんけども。

肥田 もうこの頃はどないなってるのか、居てはることは居てはるのでしょうかねえ。

後藤 それと、多分戦後そうなったんでしょうけど、古本屋さんも東京の神田に一極集中してきているような気がするんです。

肥田 東京に全部集中してます。

後藤 戦前からそうでしたか？

肥田 そりゃ詳しいことは知りませんが、大阪は大阪での商圈があったと思いますねん。そこを目指してね、反町茂雄さんとか熱心な業者がね、そこを目掛

けて、買い物に来てたんやと思います。そやけど、戦後は完全な東京一極集中。

後藤 ですねえ。

肥田 そんななかで京都の思文閣は頑張ってはりますなあ。

後藤 そうですね。美術関係も強いですね。

肥田 思文閣はもの凄い盛大でんなあ。大いに気い吐いてはって。これはもう日本の大きな存在やと思います。

後藤 それと、関西では特色のある古本屋さんがもう少し地方にもあって、伊賀上野の沖森直三郎さんとこは俳諧関係で有名でしたね。

肥田 沖森さん。亡くなりましたなあ。

後藤 私も上野まで伺って、近松の丸本を分けていただいたこともあります。

肥田 買いやすうました。お値段のほうも、そんな無茶な値段つけはりはしませんしなあ。

後藤 そうですね。本を全然表には出しておられんですが、欲しいものを話すと奥から出してこられて。

肥田 お蔵にはなんぼでも持ってはりますからなあ。

後藤 ああいう商売をしてはったのは、京都の寺町の竹苞楼さんの分かれの竹僊堂さんもそうでした。

肥田 寺町の竹苞楼さんはもう、一番古い本屋でんなあ。私なんか、目録くださるところは目録いただいで。ほんで手に合うもん。経済的に余裕があらはしません。そやから目録くれはる中で、ほんまに手にあう安い本を狙うて。楽しみでずいぶんおもしろいもんを買わしてもらいました。楽しみました。高いものはよう何にも買いまへん。

後藤 先生の場合、むしろ本屋さんも気がついておられんような価値のあるものを、目録やらで発掘されて。

肥田 そりゃありまへん。古本屋は何でも知ってはります。中尾松泉堂さんなんか鷹揚なもんやさかいねえ。元禄の『役者評判記』の良い本なんかを、大丸の即売会で、ほうり出してはりました。題忘れたけど。関西大学に買うてもらいました。元禄時代のええ本でした。中尾さんは漢籍とか硬いもんがご専門でねえ、よう知ってはんねんけど。軟派のほうは、

ご主人も弱いんですわ。そういう目こぼしがございますからね。

後藤 得意不得意がございますから。やわらかいもんですと、この西鶴の『好色盛衰記』ですが。

肥田 これ、中之島図書館で翻刻複製しはった。中之島だけにしかない天下の孤本です。住友さんから貰いはったもんです。中之島図書館ができた時に、住友家から沢山本いただきはったんやけど。その中にね、西鶴本が相当部数入ってまして、それが中之島図書館所蔵の西鶴本の核になってまんのや。その寄贈がな、あれ、明治36年ですわ、府立（中之島図書館）できたん。明治36年の時点で、大阪の一商家で西鶴本をあれだけ持ってたというのは、大したことやと思います。

後藤 そうですね。

肥田 もちろんね、西鶴は一部では人気のあった作家やけど、なかなか西鶴本を、三つも四つも持つてるゆうことは、ほとんどなかったと思います。その後、西鶴本は蔵書家の間で取り合いになって。天理（図書館）が一番ようけ集めはって。そやけどずっと早い、明治の初期の段階で、一家庭で西鶴の本を、五、六部も持つてはるいうたら、そらもうどこ見渡してもなかったと思う。案外その事がね、西鶴学の中でも問題になってないと思う。

後藤 ああ、なるほど。

肥田 中之島図書館の場合はねえ、非常に損してはりますわ。ええ蔵書持つてて。それが案外知られてない。学者の大半東京やさかい。大阪の蔵書の事情なんてこと、ほとんど皆さん念頭にない。

後藤 そうなんでしょうね、その中之島図書館に住友さんから、ご本がたくさん寄贈された。

肥田 建物もです。住友家の蔵書と。住友のご当主の春翠（住友友純）さん。西園寺公望さんの弟さん。徳大寺家から住友へ婿入りしはったときに、お公家さんのお家から蔵書持つてきてはる。

後藤 なるほど。

肥田 その旧華族の蔵書と、住友家、本来持ってた商家。大阪の一商家、持ってた蔵書。それも全部寄贈しはった。そやから、むこうの和本の基礎のええとこは住友蔵書ですわ。せやけど、そのことは誰も問

題にしてない。住友さんもそんなこと自慢にも何にもしはらしません。けどなかなか、筋のええ蔵書が揃ってるんやと思います。中之島図書館はやっばり、日本でも有数のええ図書館です。

◆子供の遊びと歌一戦前の大阪の「記憶」一

後藤 ちょっと話が変わりますが、先生のお小さい頃に、島之内でお育ちになって、その頃の子供さんの遊びですとか、その時に歌、歌いはったと思いますけど、どんな遊びやら歌がありましたでしょうか？

肥田 私が昭和5年生まれで。幼児の記憶いうたら、昭和10年、11年と幼稚園いってましたんで、記憶としては、風水害が昭和9年でんねん。このえらい雨風の記憶があるかなしかいうところです。

後藤 ああ。四天王寺の塔が倒れたという・・・

肥田 昭和9年の9月。10年の幼稚園の一年目から、わりに子供の時の記憶は残ってたように思います。ただねえ、私らが子供の時の大阪の子供たちの遊びというものは、いわゆる『上方』やとか、郷土研究の雑誌や書物に出てます、古風な大阪らしい、童謡だとか、あるいは童戯、子供遊びだとか、そういうものは一切関係なし。

後藤 あ、そうなんですか。

肥田 そらもう、味気のない、まあ言うたら近代的なもんですわ。そらしょうもないもんです。ただね、私の場合は、父親が明治33年、1900年生まれで。私が小さいとき、自分が子供のときのことを思い出してね。父親が子供の時に、近所でみんながこういう風なものを歌ってたと言うて、「狎わん、猫にゃん、チュウ」の歌やとか、「一おいて廻ろ、こちゃ市たてぬ、天満ならこそ市たてまする」数え歌でね。そういう、自分が子供の時に知ってた歌とかね、思い出して聞かしてくれました。それで明治大正時代のこと、父親から聞いてることで、大阪にこういうもんがあったなあって知ってます。知識なんて、父親から聞いたこと。ほんで『上方』なんぞで読んだこととてございますね。私ら自身の、私らが子供の時に遊んだもんは、そらあ味気のない、しょうもない事ばかりですわ。

後藤 具体的にはどんなことをございました？

肥田 やや古風なのは、「一町目でまだまだ」かなあ。「二町目でまだまだ」言うて、こっちから、みんな横に並んで。「一町目でまだまだ、二町目でまだまだ」言うて、ポーズ作って出てきまんねん。そいでどないしたかな。

後藤 それは鬼がこう、壁かなんかに横一列に並んでる子供達に向かってやる、あれですか。

肥田 あんまり私も関心がないさかい、忘れてしまいましたわ。それから、あれがおましたな、「中の中のこぼんさん、なんで背が低い」。「親の海老食べて」。あれ、「親の逮夜に海老食べてと」言うそうやが、私らは「中の中のこぼんさん、なんで背が低い。親の海老食べて、そんで背が低い。座ってみよ、立ってみよ。後ろに誰がいる」、真ん中に男の子が、こうしてうずくまって、周りにはみんな円陣になって回りながら歌をうたう。その子の後ろに立ってる子を当てまんねん。だれだれちゃん言うて。「中の中のこぼんさん」は、これはもうみんなやってた。これなんか、古風なことでしたなあ。

後藤 我々の子供の頃ですと、「かごめかごめ」っていうふうに。

肥田 「かごめかごめ」でっしゃろ。あれ、大阪なかった。私らんとき。

後藤 それが「中の中の」？

肥田 それは「中の中のこぼんさん」と似てまんのやなあ。たぶん。

後藤 そうですねえ。今、伺ったら非常によく似てます。

肥田 「かごめ」は大阪にはなかった。大阪もねえ、私は島之内ですけど同じ船場や島之内でも小学校の区内によってね、そのへんはバラバラやったみたいですよ。誰かその地域で、ちょっとしっかりした男の子でみんなをリードするようなのおったら、それに従ごうて遊んでまんねん。そやから、その子の裁量しだいですわ。その子が親から教えられた通りやるから。大阪固有のどうしても船場でなけりゃあ島之内でなけりゃあというものは、もうなかったと思う。

後藤 そうなんですか。

肥田 あこのころの男の子の遊びは、「どっしん」ですよ。それと「すいらい」。「どっしん」ちゅうのは帽子を横に被るのと、後ろに被るの、庇を、前に被るのと三つに被り分けて。試合開始で、二手に分かれて、みんな隠れまんのや。ほんで、追う方はな、どっしん言うてドーン当たって。これはこれに勝つとか、これはこれに負けるとか。そんな「どっしん」。そら、無粋なもんです。兵隊主義の影響だんな。そ



れと「すいらい」ちゅうの。これも、同じこと。こんな色の紐がございますねん。綺麗な紐でんねんで。これは売ってたと思います。赤やとか紫やとか水色やとか黄色やとかグリーンやとか。それが、糸の色に勝ち負けがあって、それをね、隠して持って。また二手に分かれて、ダーっと隠れて、ダーっと入り乱れて、ほんでドンっと当たったら、糸パッと出しまんのや。「すいらい」ちゅうって。それ「水雷艇」ってことやと思います、白が一番強いとか、赤は何に負けるとか。

後藤 そうすると、負けるとそれを取られるんですか。

肥田 そう。糸を取られたんやと思います。

後藤 なるほど。

肥田 それと、「べった」や「ばい」や「ラムネ」はみんなやりました。

後藤 それはもう、どこでもやったようですね。

肥田 それで「ばい」はわりに学校がうるそうてねえ。

後藤 ああ、そうなんですか。

肥田 「ばい」は賭博性があるので学校がうるさく下火でした。私は実際によくない。不器用でしたんで。そやけどゴミ箱の上に、ゴザひいてみんなやりました。「べった」もみんなようやりました。それから詰め将棋に行軍将棋っていう将棋ございました。そんなもんで家の中で遊んだり。その他どんなもんやろ。わりかし遊ぶもんは豊富やったんやとは思いまんねんけどね。大したものもございません。風情のあるようなもんは。

後藤 「べった」は先生の頃は、丸でしたですか、四角でしたですか、形は？

肥田 私らの時は人型ですわ。

後藤 へえ、人型ですか。

肥田 戦後は長方形。

後藤 そうですね。私の地方では丸もありまして。

肥田 戦後は、長嶋やとか、巨人の監督してた川上哲治とか。これは四角でした。しかしこれらは私の弟の時代で、戦前はなかった。昔はね、みんな人型で、横綱の玉錦。武蔵山。男女之川。双葉山など。笠置山が早稲田大学出身の学士相撲で人気がありました。相撲が多ございました。

後藤 そうですか。子供さんの遊びとしてはそのようなところですか。歌はどんな歌、歌っておられました？

肥田 歌はやっぱりね、学校の唱歌が主導してたんちがいますやろうか。

後藤 友達同士で。

肥田 子供の時の歌う歌なんて、あったんやろかなあ。私、案外ねえ、童戯とか子供遊びに疎うございまんのや。子供の言葉遊びにね、「通天閣高いな、落ちたら怖いな。天神橋長いな、落ちたら怖いな」なんか。あれ、大阪で子供が寄ったら皆でわーっと合唱するようなことがございました。それとシトリ言葉。日露戦争のあと。「日本の乃木さんが。凱旋す。スズメ。メジロ。ロシア」。

後藤 それは私も聞き覚えがあります。

肥田 これはわりによくみんな言うてましたけど、年上の兄貴とかに教えられて、覚えてったというふうな感じやございませんやろか。

後藤 なるほど。それではもう少し上の年齢になると遊びとかまた別でしょうね。

肥田 私の一代代上。大正10年代だんなあ。大正の10年から15年まで。あるいは大正元年から10年まで。無味乾燥ですね、この世代。

後藤 そうなんですか。

肥田 そう思います。この世代で、子供の時代の思い出書いた文章なんて、ひとつもあらしまへん。のんびりとした懐かしい思い出なんて、筆にする人あらしまへん。そういうものを懐かしいなあと思って共感して、ああ、私らの上の世代、こんなことしてはったんか。私らも知りたいんですわ。知りたいんやけど、そういうもんを書いてる人、少ないと思います。

後藤 なるほど。

肥田 たまに書いてはっても、キザっぽくていかにもこんなことしてたんだっていう、見せびらかしみたいな。わりに嫌味のある人が多くて。そやから大正時代の世代はわりにあじきないと思いまんねん。その点、やっぱり明治時代の人はおおらかですわ。

後藤 なるほど。

肥田 生島遼一先生。京都大学の仏文の。この方、晩

年になってから、随筆書きはって。子供時代のこと書いてはりますが、素晴らしいです。明治時代の人は、ゆとりもあるし。ところが、あの方明治30年代。私の父親も明治30年代で。わたし明治30年代の人ということを、ちょっと考えてみたことおますねん。みんな古い大阪が嫌いです。

後藤 そうなんですか。

肥田 揃ってそうです。古いのしかかるような旧家の重み。封建的な旧家の重み。それが子供の時からみんな耐えられなかった、嫌いやった。そっから開放されたいという。そういう気持ちで大きくなってなあ、ということに気づきました。そやから、明治30年代の人は、古い大阪のことお嫌いです。ちっとも書いてはらしまへん。書きたいような思い出ないんです。この世代は。南木さんは明治15年です。永井荷風も明治12年。さすがに明治10年代の世代は古風です。情緒あります。なんかしらんけど。それで、明治20年代になったら、小出楯重とか、まだ何か懐かしいとこあります。そんで30年代の人、みんなようできた立派な仕事残してはります。そやけども、古い大阪は嫌いやったんやなあ、と。そのこと考えて、はっと気づきました。

後藤 なるほど。そうすると30年代の人たちが、やはりだんだん力を持ってきはって、大正のモダンズムに。

肥田 大正は、それ引き継いでます。

後藤 そういうことですか。

肥田 戦争で痛めつけられて、そら気の毒ですわ。ほとんどの方がなくなってますもんなあ。大正のおかたは。戦争の犠牲になられて、胸ふさがります。

後藤 先生が中学生になられた頃は。

肥田 私は高津中学。後の高津高校。300人はいました。昭和18年。大阪中から、わりにようできるん集まって。けど趣味的な人間ひとりもいてしまへん。そら、みんなようできまんねんで、勉強。東大何人も、京大も何人も行きました。そらみんなようできまんねんけど。趣味的なこと好き者、ひとりも居てしまへん。後に年いってから絵描いたり、個展やったりとか。けどみんな付け焼き刃ですわ。私は芝居も好きやし、映画も好きやし、遊ぶ事専門

みたいなことでしたんで、子供のときからほんまに勉強できんであかんかったけど、風流ごとというたら変やけど大好きでした。そやけどそんなことで気の合う友達は一人も居てません。

後藤 そうすると、その頃は年代的に言ってもあんまり遊びとかは？

肥田 大正から昭和前期の年代ちゅうのはね。私、記憶にあるのが昭和10年から以降。昭和12年7月7日に支那事変が始まり、それでただちに戦時体制。国民総動員ちゅうことになって。ただ、昭和12年か13年は、戦時体制とは言え、それまでのわりに気楽な気分引きずって。戦争や言うても、わりに勝ち戦が続いて、ほんで気分が伸びやかで、出征兵士送るのでも派手なことでした。兵隊に行きはるお家が出たら、みんなでバンザイ言うてお送りして。築港から船で行きはる言うたらね、みんなトラックに乗って、近うまで見送りに行きまんねん。

後藤 なるほど。

肥田 大阪中を走りまわってましたわ。昭和12年中。さすがに昭和13年になったら、そんなことも自粛せよ、ということになったんです。そやからね、戦争やいうても、昭和12年のときはもう、勝ち戦続きやしねえ。それでも、一応、国家総動員の戦時下でした。私とおんなし世代の人間、昭和15年で小学校4年生です。戦争中の窮屈な生活しか知らしまへん。伸び伸びした、平和な時代の気楽な気分ちゅうのは知らしまへん。まして、昭和10年から20年に生まれた人なんて、もうまったく。昭和10年生まれが、小学校の3年で終戦になってまう。もうそれからは窮乏生活。ろくな時代やおまへんわ。

後藤 そうですね。

肥田 幼児の記憶なんて言うたらねえ、索漠たる記憶しかあらしまへん。昭和生まれなんて、精神的にもの凄い貧弱なもんです。私は幸いに子供の時に両親が芝居観たり映画観たりするのが好きで。早うから、親が観に行くのについて行ったりしてましたんで。歌舞伎や、映画や、宝塚歌劇や、松竹のOSK劇団やとか。文楽も。私は必ずついていきまんねん。母親が行くのに。

後藤 なるほど。

肥田 だからね、小さい時にわりにそないして観てた
もんで。それからミナミに居てましたんで。ミナミ
の繁華街の、百貨店なんかの雰囲気、幾分か戦前の
気分が、まだ昭和13年、14年ごろは、わりに戦前
の贅沢な気分ちゅうもんが残ってた。それがだんだ
んと窮屈になってきて、昭和15年、紀元2600年の
頃はまったく統制下で、物はないし。だから、同時
代のみんな、そういう時代しか知りまへんさかい、
ええこと知ってるわけございません。

◆大人の楽しみ(1) 一子供も魅了した津太夫一

後藤 その頃、そういうご時世ですと、お父様がお家
で歌を歌うなんてことはなかったでしょうか？

肥田 父親はピアノ弾いてました。趣味でね。それで、
明治時代の童謡なんか、こんな歌うてたと、自分
で譜作って、ピアノで弾いて教えてくれました。一
曲か二曲のことですけどもね。そやから「狎わん、
猫にゃん、チュウ」、「牡丹に唐獅子竹に虎」なんて、
そんな歌。父親が教えてくれたんです。

後藤 そうなんですか。

肥田 「ねんねころいち天満の市場」とかね。みんな
父親が教えてくれたんです。一応その節はしてま
すけど、それは、私だけのことでね、私の世代でそ
んな者は、ほとんどないと思います。

後藤 そうでしょうね。で、その頃ですともう当時の
大人の方たちが、歌を歌うっていうのは、例えば、
御茶屋さん行ったときとか、そういうことなので
しょうか？

肥田 それはまた別でっしゃろなあ。お茶屋で歌うの
は。大阪の若旦那は成人の過程で、いろんな稽古を
したんやと思います。明治時代は特に、みんな謡は
必ず習う。もう必須のもん。その他、自分の好みで、
いろんなものを、長唄やとかね。ただ清元やるなん
てよっぽど変わってると思う。そやけど時期的にも
お茶屋で遊ぶような人。ちゃんとした唄、歌えるよ
うな人、そんなにいてへんのとちゃいますかな。流
行歌を三味線弾かして大騒ぎする程度ちゃいまっ
か。私、そんなことしたことないからわかりませ
んけど。

後藤 我々生きてますのは、昭和10年代ですと素人
義太夫がけっこう盛んで。

肥田 これは栄えてましたなあ。

後藤 ただ、それ以外のさきほどおしゃっていたよう
な、習い事としてやるのは、それは町の中にお師匠
さんがいてはったんですか？

肥田 稽古屋がずいぶんあったようですよ。私知りま
せんねんけど。大正時代までは各町内にあったん
ちゃいますやろか。それがだんだん、昭和なってき
たらねえ。なんか世の中が世知辛うなってきて、
減ってきたんじゃございませんやろか。それでね、
ちょっと話飛びますけど。今年の春のOSKの「春
の踊り」、松竹座の。山村若さんの振り付けでね、レ
ビューの幕で、大阪の明治時代の、童謡。「おんご
くなはは」「一おいて廻ろ」ずーっと十番まで。そ
れから大阪の盆踊り「かんでき割ったすり鉢割っ
た」。それからまだおました。それメドレーでやっ
たんですわ。私手え叩いて。一緒に歌うてた。「え
えぞええぞ」言うて。そやけどお客さん、まったく
反応ない。

後藤 はあ、そりゃあご存知ないでしょうから無理な
いでしょう。

肥田 無反応。プログラムみたら「民謡メドレー」っ
て書いてある。せめて「大阪童謡メドレー」とかね。
番組だけでもそないしてくれたらなあ。プログラム
で、「この場面は大阪の明治時代の子供の懐かしい
歌をレビューに取り入れました」と、一言説明あっ
たら。それに、思いました、今のOSKが大阪
童謡やったのは、二遍目でんねん。前に「橋尽くし」
いうレビューでやった時も、住吉踊りを踊ったり、
「一おいて廻ろ」を花道みんな歌いながら回ったり
してました。せやけどねえ、お客さんがご存知ない
もんやから、客席しーんとしてる。やる方は一生懸
命やってるし。演出は山村若さんも工夫して、やっ
たんや思うけど。内部で評判悪かったそうです。昭
和の始め、大阪のものが嫌われて。大阪落語は疎ま
れるし。大阪本来のものを、なんかこう疎む時期お
ました。漫才は非常に勢い出てきまんねんけどね。
大阪本来の古い、そういう芸能がなあ。そんなんで、
文楽もずいぶん苦しかったと思います。

後藤 そうですねえ。

肥田 幸いに昭和5年、文楽座が新築して、津太夫、土佐太夫、古靱太夫と、文五郎と。名人が全部揃ってたから。松竹も力いれたし、お客さんのほうも珍しもん好きで文楽は劇場新しくできたから、気持ちよろしましたもん。文楽座出来たときは、ええ劇場やったですさかい。そやさかいに、持ち直してね。文楽のこと、ちょっと申し上げますとね、私、昭和13年の5月、初めて文楽を見ました。家が島之内でございましたので、四ツ橋の文楽座、同じ島之内。母親に連れていってもうて。その時ね、『ひらかな盛衰記』の「松右衛門内から逆櫓」それと『新板歌祭文』の「野崎村」と「油屋」。それから、『日吉丸稚桜』の「小牧山城中」やったかな。あんまり記憶にないんですけども、「野崎村」は覚えています。それとねえ、あとになっておかしいなあと思うのは、古靱さんが「油屋」語りはって。寝てまんねん。私、子供んとき、古靱さんの語りはるとき全部寝てます。あの人の浄瑠璃は、子供には絶対わからない。後年なって思い出したら、古靱さんの語りはったもん、完全にみんな寝てる。

後藤 それは可笑しいですね。

肥田 それで後でねえ、武智さんやとか、渡辺保さんやとか、有名人が口を極めて褒めはる。それはわかりまんねん。それはわかんねんけど、私の現状はそういう惨めなありさま。ただ私、嬉しいことは、先代の津太夫の「沼津」、これは子供心にもすばらしいとおもいました。

後藤 やっぱりそうですか。

肥田 舞台が最初の街道で、松並木が動いて、そいで津太夫が機嫌よう語ってはりました。それと昭和14年の1月、兄とふたりで正月公演、舞台際が一番前のとこにふたりで座って『嬢景清』を見ました。津太夫の。そしたら最後の幕切れでねえ、景清の眼がかあっと真っ赤になりまんねん。子供心に怖かったですわ。

後藤 あの首、迫力ありますからね。

肥田 ほんならな、後に本で読んだら山口広一さんなんか、「津太夫の『嬢景清』は、津太夫では最高の舞台やった」というて書いてはりますさかいな。はあ、

私ええもん見せてもうてたんやなあ思うてねえ。ええもん見せてもうて、ありがたいこっちゃ。それとねえ、中学生になってから、大隅太夫の『近江源氏先陣館』。これは中学、大きくなってますさかい、よう覚えてます。「逢坂山のさねかずら」ちゅうとこ真似して。文楽座も昭和の10年代。なかなか、文楽よろしましたもんなあ。

後藤 そうですねえ。やっぱり三巨頭で、最後の華の時代ですね。あれからは、古靱太夫さんおひとりになってしまいましたので。やっぱりシンドイなあと思います。

肥田 それから栄三さんが同じ町内でしてん。鍛冶屋町の鰻谷。ほいで、栄三さんとこの前、私毎日の様に通ってました。お菓販売してはりまんねん。昔、そういうお家多かったですわ。仕舞屋でねえ。お菓、漢方菓を扱ってはる。その看板ういか掛け札かかってて。時によつたら夏なんか床几で涼んで、こないにして煽ぎはったように思いまんねん。

後藤 もう、小柄な方だったそうですね。

肥田 藤沢桓夫さんなんかも、栄三さんの思い出書いてはります。藤沢さんも島之内で。それとねえ、文楽では斉藤清二郎の絵葉書好きでした。そやけどあの絵葉書は高うてねえ。なんぼ親にねだるいうてもねえ、あれは買うてくれって言いにくまんねん。せやから三遍に一遍、やっとな枚買うてもらうとかねえ。せやけどあれが好きで好きで。欲しくて欲しくてしょうがなかったです。それとね子供の時、宮尾しげをさんの『文楽人形圖譜』でましてん。それまで宮尾しげをの『手と足』持ってましたんでな。それが好きでしたんですわ。そしたら『文楽人形圖譜』出て。そら好きでした。あの本は暗記するほど。いまでも私、文楽の知識言うたら、完全にあれですわ。七段目の平右衛門がこんなして語るとかね。もう、そんなことはみんなあの本から。あの本で小道具の説明してはる。あの小道具はこうやねんとか。それでね、幸い父親が本好きでしたんで、私が歌舞伎好きやいうもんやから、ちっさいころからわりに演劇関係、歌舞伎関係の本、よう買うてくれましてん。

後藤 なるほど。

◆大人の楽しみ (2) 一上方歌舞伎と鴈治郎一

肥田 それから歌舞伎関係の本がなかなか好きでございまして。三宅周太郎の本なんか中味はわかりもしないねんけど。戦争中ね、歌舞伎の本、よう出ましたんや。それを父親がずーっと買ってきてくれたんでね。ただまあ、残念ながらそれは戦災で焼けてしまうけれども。せやけど戦後、すぐにとりかかったんは、三宅周太郎の劇評集を全部集めるとか。そんなところからやり始めたしだい。後に高校生の時に戸板康二の『わが歌舞伎』。それから『丸本歌舞伎』。これを読んで、まったく洗礼されました。それまでほんやり見てたわけですわ。歌舞伎ずっと観てて。理論的なこと何もわからしません。それが戸板の本読んでね。今までほんやり観てきたことがいっぺんに「あっ、こういうことやったんや」と。了解は早い。やっぱりずっと観てますんで。それから戸板の本、全部見えます。大正時代の作家とか、評論家の著述を、私全然見ないんです。せやけど武智と戸板だけ見えます。武智は、『武智歌舞伎』と『歌舞伎の黎明』は出たときに見ましたけども、『かりの趨』は後に古本で手に入れて。戸板は本の出るごとに熱心に読みました。自分の話ばっかして申し訳ないんですけど。

後藤 どうぞどうぞ。

肥田 この前、24日の日に松竹座の夜の部観てきました。よう入ってます。夜の部に『雁のたより』、甞雀さん一生懸命やってはりますな。

後藤 以前、文楽劇場で今の藤十郎さんで。

肥田 成駒屋、やりました。よろしゅうおました。

後藤 綺麗でしたね。

肥田 あんなアホな事がほんまに自然でね。

後藤 いやもう、私、先ほど申しましたように、出が上方やないもんですから、上方の男性の、特に芝居に出てくる人たちのなよなよとしたところ、どうも私たちにはもうひとつ共感できないんです。

肥田 つころばしみたいな。あんなん、よその国の人たちは誰かて、えー、なんでかいなと思わはります。

後藤 もうやっぱりねえ、ああいうのがお芝居になるっていうのは、なるほど上方文化というのはそう

いう世界なのかなって思いました。

肥田 『雁のたより』でも藤十郎さんやったら、「なんぞ言うてか、かすかに聞こえる」。そういう決まった台詞がしっくりくるんですわ。今はもううつる人がいてない。残念です。さっきも申し上げましたが、わたし、わりに早うから歌舞伎観てまんねん。昭和12年の5月、大阪歌舞伎座で、3代目中村歌右衛門百年祭。その時に、5代目歌右衛門と中村吉右衛門がメインで、興行ございました。母親が連れていってくれて。小学校1年生です。これが、私の記憶に確かにある歌舞伎の最初。その時に歌舞伎が好きになったらしいです。後年『松竹七十年史』の年譜みたらねえ、昭和12、13、14、大阪の歌舞伎興行全部観てまんねん。自分でもびっくりしました。

後藤 すごいですね。

肥田 その時分、私んとこの家で、松竹の株式を、幾分か、持ってた時期やったらしいんです。そうすると毎月来まんねん。

後藤 株主優待の招待券。

肥田 映画は映画でうんと来るし。芝居、歌舞伎でも、高価な歌舞伎でも最低2枚は。特等席の。大阪の演者の芝居やと3枚ぐらい。家庭劇やと4枚ぐらい。毎月とにかく。そうすると、父親は映画ばかりで。その時分、芝居観んようになってまして。母親しか行かしません。それで私いつもついて行きました。そんなことでねえ、たった3年ほどの間やけども、大阪のその時の歌舞伎を、熱心に観てて。やっぱり、好きやったんでしょかねえ。案外記憶してまんねん。子供の時に観たとはいえ、案外大人になってから観るよりも、子供のときのほうがなんか。

後藤 印象が強いんでしょうねえ。

肥田 それとね、帰ってから番付と、ほれから父親が『演芸画報』買ってきて、繰り返し繰り返し見まんねん。そやから全部覚えてしまっ。5代目歌右衛門『春日の局』、吉右衛門の『俊寛』、三升の『不動』歌舞伎十八番、この時に見ました。ほいで、昭和13年3月、12代目仁左衛門襲名興行。市村羽左衛門、松本幸四郎。12代目片岡仁左衛門、大谷友右衛門。これは昼夜行ってます。昼は3人の『勧進帳』。羽左衛門の『実盛物語』。仁左衛門襲名狂言の

『三千両』、あの「黄金の蔵入」。夜の部は『助六』です。羽左衛門。『三人吉三巴白浪』。この時のほんとは鮮明に覚えてます。

後藤 その時が、仁左衛門さん襲名なのどこにも書いてないという。

肥田 この仁左衛門の襲名が今思うたら不思議なぐらい。番付にも「三月大歌舞伎」と書いてあるだけ。どこにも襲名なんて書いてない。せやけど座組みは超豪華です。7代目幸四郎、15代目羽左衛門。12代目仁左衛門のええ狂言を観ることができました。それと、菊五郎です。私はねえ、大阪に来てる菊五郎、その3年間に来た菊五郎全部観てまんねん。そやから『娘道成寺』『鏡獅子』『船弁慶』『藤娘』みんな。

後藤 へえ。

肥田 芝居も、『天下茶屋』も。昭和15年になったら戦争中で、新作の『木下藤吉郎』。その時は『吃又』やりました、菊五郎が。梅玉のおとく。で、ちょっと後に『合邦』、吉右衛門の合邦で。梅玉の玉手も観ましたなあ。そうしたらねえ、私の世代でなあ、そんだけ観てんのんが、案外いてません。大阪は延若、魁車、梅玉。それから宗十郎がわりによ来ました。沢村宗十郎が来て、延若と。宗十郎の民谷伊右衛門で。延若のお岩。魁車の宅悦、とかね。ほんで、菊五郎来た時に菊五郎のお光で、これが評判でした。

後藤 野崎の。

肥田 大根切ってなます拵えするのが評判でね。この時に宗十郎が久松で梅玉がお染です。そんなものをよう覚えてまんねん。それと強烈に記憶にあるのは、延若の『沼津』の平作です。魁車が重兵衛やったんです。ところが魁車が病気で休演になった。鴈治郎が重兵衛やったんですわ。だから、延若の平作と2代目鴈治郎の重兵衛。またこの重兵衛が素晴らしかった。この時に私、鴈治郎いう役者が大好きになりました。その後あの人の重兵衛何べんも観てます。そらいつ観てもほんとによろしおました。そんなことでねえ、私ずーっと年いってから思い出して、やっぱり子供の時に、これ観たんはほんとに運がよかったなあと思って。

後藤 そりゃ、幸せですよええ。

肥田 私より上の世代のひとつでも、歌舞伎が好きや言

いはっても、6代目も知らんて人なんぼでも居てはる。私、知らんのは梅幸と中車と。福助は早うに死んだんやけど。あと左団次。左団次は大阪に来なかつたから。大正以後、大阪に来ませんでしたんで、これは知りませんでした。

後藤 なるほど。

肥田 ところが、後年、私病気になりましてねえ。昭和33年、病気で寝てしもうたんで、歌舞伎ほとんど観んようになりました。もっともその時点から大阪の歌舞伎はあかんようになりまして。もうほとんど歌舞伎らしい歌舞伎はなくなりました。もっとも戦後もわりに熱心には観てまんねん。やっぱり鴈治郎でしたなあ。大阪は寿海の時代やけども、私はそれはもう鴈治郎。『太々講』の正直正太夫や『桂川』の丁稚の長吉。もう、度肝抜かれて。すっぱらしいもんでした。あんな素晴らしいもんじゃないと思う。

後藤 そうすると、戦後もそんなふうにして、歌舞伎をご覧になってましたけど、戦争終わってから、世の中がらっと変わりました。先生はご病気になられて、結局そういうことからはなれた立場でご覧になって、上方の文化全般の、どんなところが一番変わったと思いはります。

肥田 あの、私そういう難しいこと考えたことおまへんねん。ほんまに。自分が観たこと中心でねえ。あれ観ましたなあいうのが楽しい。もう、それだけでんねん。それで、戦後も菊五郎ずっと来てましてねえ。6代目の大阪公演最後になる。『柿右衛門』の陶工柿右衛門やりはってねえ。その時、松緑の『勧進帳』出ましたんや。あの人、戦争でマラリアかなんか患われてねえ。ほんで歌舞伎座でその『勧進帳』やってはるときに急に発病して、舞台立てなくなって。そやけど弁慶が休むわけにいかへんしね。ほんでね、菊五郎、柿右衛門の衣装のまま幕前に出てきはって「松緑が病気で具合悪なりまして、ほいで彦三郎に弁慶つとめさせます。彦三郎は私の甥になります。なかなかできませんけど、指導しました。観てやってくれ」ちゅう。ほいで彦三郎が弁慶やりました。後年羽左衛門なりはってから、ついに東京でも弁慶やったそうですけどねえ。どっかで書いてはりました、弁慶長いことやる機会がなかったいうて。

後藤 なるほど。

肥田 晩年、羽左衛門になりはってから評判よろしいがな。私、若い時から好きでした。あの人、物知りですわねえ。小道具なんかものすごう精通してはる。やっぱり名家の御曹司ですわ。おっとりとなあ、歌舞伎界の横でずーっと、じーと見ながら成長して。焦る事あれへんから。おっとりして。そんなとこ13代目の仁左衛門と似てますわ。もの凄い知識が深い。ほんで晩年にふたりともようなりはった。これも共通して。長生きしはってよろしおましたわ、ふたりとも。

◆大阪の文化、歌舞伎・文楽への期待

後藤 ところで、大阪の歌舞伎が面白くなかったのはいつぐらいからですか？

肥田 これは明らかですわ。中村雁治郎が歌舞伎捨てたから。中村雁治郎が大阪の歌舞伎を捨て、映画行っただけです。これは明らかです。鴈治郎ちゆう人は一門を率いて、大阪の歌舞伎を支えていこうとか、そういう気はない人です。自分はものすごく芝居ができませんわ。何やらしてもそら、お客さん喜ばしはる人です。そやから鴈治郎の芝居はなに観ても、そらもう、結構なもんです。けど自分で、まわりを育てて、大阪の面白い芝居を観せよう、観せてやろという、そんな気は毛頭あらしません。それが大阪歌舞伎崩壊の元です。鴈治郎が大阪歌舞伎を見捨てたんで、大阪の歌舞伎は滅びた。

後藤 なるほど。

肥田 その後、鴈治郎、東京で歌舞伎に戻りはって、そしたら、芝居は出来る人やから、東京でもみんながびっくりして見はったけどね。大阪で大阪の芝居を観せてやろうって気は毛頭あらしません。

後藤 それで、鴈治郎が歌舞伎やめて映画に行っちゃいました。その後でしたか、武智さんが、鶴之助や扇雀を一生懸命鍛えて。

肥田 武智さんがあれやったんは、その前ですわ。

後藤 ああ、そうでしたわ。

肥田 武智歌舞伎の時はみんな大阪で、鴈治郎も箕助も我当も、みんな一緒に歌舞伎座で芝居してはりま

した。その中で、扇雀と鶴之助、延二郎、雷蔵とそれから鯉昇、嵐鯉昇。吉三郎の息子。そんなん使って。実験歌舞伎。文楽座でやりはった、始め。二回か三回やってはりますわ。私、残念ながらこれよう観てまへんねん。

後藤 それは残念ですわ。

肥田 その後の武智さんの、いろんな実験的なことしはりました、それはひと通り拝見しました。新しいオペラで谷崎潤一郎原作の『白狐の湯』。それから岩田豊雄作『東は東』。それから芥川龍之介原作『きりしとほろ上人伝』。いろんな実験的なことをやりはってね、そらみんな見事なもんでした。武智さんならでは。これは権藤芳一さんが武智さんのこと、とってもお詳しい。権藤さんは同時代にずーっと、武智さんの横にいてはりましたからなあ。『きりしとほろ上人伝』なんて「武智の企画の中で、もっともええもんやなかったか」って、最近書いたの見ました。結城孫三郎の操りの、こんな小さい人形。ほんで今の千作老人、茂山七五三さんが「きりしとほろ」役。大きなね。その中に小さい結城の人形。ほいで語り木村若衛の浪花節です。それが何の違和感もない見事なことでした。武智さん言う人は、あんな思いつきのようなことやけど、とにかくやっちゃいます。やっぱ脂のっちはったんやなあ。

後藤 そうでしょうねえ。まあ文楽もひとつだけ、演出をしていただきました。木下順二の『瓜子姫とあまんじゃく』。現代語の浄瑠璃です。そうすると、後は松島屋さんが朝日座で上方歌舞伎を。

肥田 松島屋13代目、上方歌舞伎ようになりました。まともな形になりました。もう15代目も継ぎはって。そいで藤十郎さんがお元気やし。

後藤 はい。

肥田 藤十郎さんは上手や。私ね、あの人『忠臣連理の鉢植』植木屋。あれなんかもうあの人しかできしまへんわ。成駒屋の芸でんね、あれこそ。それと、忠臣蔵の三段目の「門外の場」お軽と勘平の。あの勘平。鴈治郎時代の勘平は、すばらしかったですわ。『忠臣蔵』、中座で通してやって。扇雀がお軽でねえ。勘平はお父さんやりはって。黒紋付の勘平の姿で。ほら見事なもんでしたなあ。他の者ができません。

成駒屋では土屋主税が私、好きだんねん。2代目鴈治郎も今の藤十郎も、今の翫雀もみんな観てまっけどな、土屋主税。愚劇や愚劇でみんな書くけど。私は子供の時に、2代目鴈治郎の土屋主税を観てねえ。ほんまにええなあと思うて。あんな綺麗な晴れ晴れした芝居、あらしません。そうそう、坂田藤十郎さん、この人はやっぱり自分が大阪の出で、上方の歌舞伎は守っていかないと、自分たちの息子の世代も孫の世代も、やっぱり大阪でみんなが支えてもらわないかんということは、あの人も頭にあります。

後藤 はい。

肥田 だから、大阪にきはった時は、「大阪の皆さん、どうぞよろしく」と言うて。ほいで、大阪の芝居もようやって観せてくれはります。

後藤 そうですね。

肥田 ただねえ、仁左衛門さんがなあ、私らが観たい、松島屋的な大阪の芝居をもう、やりそうにない。『桜時雨』の灰屋紹益やとか、代々家の芸としてた『鰻谷』とかね。

後藤 はいはい。古手屋八郎兵衛。

肥田 お父さんが得意とした『大文字屋』なんていい芝居。

後藤 出ませんねえ。

肥田 こんなええ芝居。この間も文楽劇場で記録映画見せてもうて、お父さんの。もう泣きました。私、舞台上で観てまんねん。お父さんの。せやけど映画でもいっぺん見せてもうて。私観た時と、後の時の上演の舞台でしたけどねえ。そら、素晴らしい。あんなのこそ大阪の芝居ですわ。ほんとに。それがね、今の仁左衛門さんはそれをやる気はなさそうですね。確かにお客さんが喜ばないみたいです。お客さんが喜ぶ事を考えはったらねえ、やっぱり仁左衛門さんも、それは自分はやって見せたいけれども、やっぱりちょっとというお考えやろうなあという。

後藤 そうですねえ。

肥田 ほんでまた、あの人は何でもしはりたい。しはらないかんことはなんぼでもございますしねえ。

後藤 そうですねえ。まあ、江戸も上方もどっちもいける人ですしねえ。

肥田 そうです。そうです。もう、これは歌舞伎全体

として非常に重要な、お方でございますのでねえ。せやからねえ、今やっばり藤十郎さんと、松島屋一家とで、上方の歌舞伎なんかして欲しいんですわ。それとねえ、ほんま余計なことなんやけど、再来年、竹本義太夫300年だんねん。文楽で、竹本義太夫300年ってほっとくわけにはいきまへんやろ。どないすんのやろ。昭和8年にねえ、南木さんが主催して、竹本義太夫220年忌つとめはって、義太夫の墓のある超願寺で、法事して。その時に津太夫、古鞠太夫、土佐太夫。それから三味線の名人がみな並んで。「蟬丸の道行」仏前で弾いて。すごい顔ぶれでした。

後藤 へえ。

肥田 せやけど、その時にやってよかったと思う。230年やったら昭和の18年。津太夫なくなって、そんなできません。

後藤 無理ですねえ。

肥田 その10年前。仮に210年、大正時代。文楽にそんな勢いあらへん。

後藤 そうですねえ。

肥田 ようやったと思う。そやから、誰ぞ300年やでって声かける人、いてはったらええんですけどな。

後藤 文楽の技芸員さんたちは、国立劇場や文楽協会の協力をいただいて、義太夫さんの墓石修復の勧進特別公演や三百回忌の法要を企画しておられるようです。先生、今日はほんとお忙しいところ、わざわざお出いただきまして、誠にありがとうございます。

肥田 お招きいただきながら、ええかげんな、さまにならないような事ばかりで。芸大の日本伝統音楽研究センターさんのご活動も注目してます。貴重音源のセミナーでもなあ、感心してまんねん。こんなええことしはるわと思って。

後藤 ありがとうございます。スタッフの人数が少ないもんですから、行き届きませんがなんとかやっております。今後共よろしく願いいたします。本日はいろいろ貴重なお話がうかがえて喜んでおります。ありがとうございました。

(記録・編集：上野正章・末松憲子・竹内有一)